ハインライン『未来史シリーズ②地球の緑の丘』のあらすじ

takaidos

地球の緑の丘

②地球の緑の丘

1967年発行。
矢野徹・訳。

宇宙時代の初期に考えられる、何気ない風景の一コマ一コマを丁寧に描いている。
各話は1940年から随時発表。

①宇宙操縦士
1947年。
宇宙操縦士の夫と妻のすれ違いの話。
最後に夫は月からの定期航路船のパイロットなることが決まり妻を月に呼ぶ。

②鎮魂曲
1940年。
『月を売った男』のその後。
月旅行に莫大な投資をしたDDハリマンは80歳？になった。
やはりどうしても月に行きたくて、博覧会で船長(パイロット)マッキンタイアと機関士チャーリーを雇ってやっと月面に降り立つ。

③果てしない監視
1949年。
月面から核ミサイルを発射すれば地球は支配下入ると考えた警察長官に疑問を持ったミサイルの技術者が放射能で汚染された管理棟に立て籠もる話。

④坐っていてくれ、諸君
1948年。
月の地下通路に取材に来た記者と案内してくれる工事担当2名が通路に閉じ込められる。
事故で開いた亀裂に大柄の工事担当が座り穴を塞ぐが冷たさで凍って来る。

⑤月の黒い穴
1948年。
家族四人で月面探索に加わった。
わがままな弟・チビスケもどうしても付いていくと譲らないので規定に反して連れて行くことになったが、途中でチビスケの姿が見えなくなってしまう。

4時間で宇宙服の酸素が切れる前に探さなくてはならない。
チビスケがわがままを言いだすと、母さんは対応に困り、同様のことを父親にする。
すると父親が僕に無理難題を言いだす。
原子力発電所は事故があって以来、月の裏側に建設されるようなった。

⑥帰郷
1947年。
ルナ・シティに3年間暮らしていた夫妻が地球に戻る。
狭い部屋に暮らして地球で顔に雨のしずくを浴びたいと願っていた妻。
地球に原子力高速船で月の重力に慣れていた夫妻の脚は痛みを覚える。
(宇宙船に原子力が使われるのは危険で商業上疑問があるという人もいる)
しかし月面での活動に多くの税金が投入されていることを皮肉る人間もいたり、外部から来た人間を差別して冷ややかな人間もいる。
トイレの配管も壊れて、よりひどい家で冬を凌がなければならない。
夫妻はついに月に戻る決断をした。
技能試験、心理試験、健康診断。
心理試験で医師が検査したのは、月に戻りたい理由で、それは高級だからという理由ではなく、真に月に住み続けたいかどうかだった。
夫妻は月に帰還出来ることになった。

⑦犬の散歩も引き受けます
1941年。
犬の散歩から何でも引き受ける会社。
政府の極秘裏の依頼で太陽系の12の種族を地球に招いて会議をすることになった。
それぞれ重力の異なる星に住んでいるので、地球上で重力場を変えることが出来ないか検討する。
気難しいオニール博士は金では動かないが、大英博物館に保存されている明朝時代の陶磁器『忘却の花』をボーナスにすると引き受けてくれ、会議は成功した。
政府補佐官？は装置を譲渡してくれ、というが会社は動産は売った、博士は自分たちの従属社員でこれからこの装置で政府相手に商売して行くという。

⑤サーチライト
1962年。
盲目のピアニスト・ベッティが月の裏側のミサイルマンたちを慰問した後、彼女の乗る艇が消息を絶った。
子午線ステーションは月を分割してレーザーで音を飛ばし、彼女に聴いてもらって位置を確認する。

⑥宇宙での試練
1949年。
かつて宇宙船の船外修理活動で宇宙空間に落下して救助された男が高所恐怖症にかかり宇宙に戻れなくなってしまう。
友人にパーティーに誘われ、35階の部屋に泊めてもらうが子猫の鳴き声で目が覚める。
子猫は窓枠の下の梁にいてなんとか助ける。
もう一度宇宙へ戻るための試験を受けてみようと決断する。

⑦地球の緑の丘
1947年。
宇宙船の原子力エンジンの故障で放射能を浴びて失明した機関士のライスリング。
金星で降ろされて詩を作り歌を歌うが、多くの人の共感を得ていた。
年取って地球に帰ろうとまた宇宙船に乗る。
しかしここでもエンジンの事故が発生し、話していた機関士は死亡。
ライスリングは自分の命が尽きるまでエンジンの管理をしたのだった。

⑧帝国の論理
1941年。
弁護士のウィンゲートとサム・ジョーンズは地球の酒場で議論していたが、目を覚ますと金星行きの宇宙船乗せられていた。
事情を説明して月で降ろしてもらおうとするが、自筆サインと指紋のある契約書には金星での労働6年間と書かれていて結局金星に送り込まれることになった。
ウィンゲートは北部、ジョーンズは南部。
沼地には両棲の金星人が棲む。
金星での仕事は農場開拓、実質の奴隷労働だった。
監督の指示に素直に従わなかった仲間をウィンゲートその仲間が助けるが、農場主はウィンゲートたちを南部の鉱山売り払ってしまおうと考える。
ウィンゲートたちを乗せたクロック(ワニ型の車？)は途中、運転手のサミイと共謀して農場主を降ろして、叛乱者たちの植民地に入る。
そしてウィンゲートは帝国主義と植民地について本を書き奴隷解放運動を起こそうと考える。
しかしそんな最中、ジョーンズがやって来て、ウィンゲートたち3人を解放してくれる。
ジョーンズは帝国主義と植民地、貨幣経済の必然性を語り、ウィンゲートの目論見は意味がないと諭す。